弥七田古窯跡発掘調査

垣間見えた美濃桃山陶の歴史

昨年度と今年度の2回にわたって行われた弥七田古窯跡発掘調査。
調査から見えてきた当時の様子をお伝えします。

調査を担当した文化財課の長江学芸員

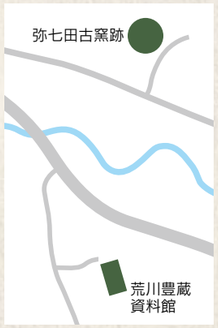
どんな調査を行ったのか

昨年度に弥七田古窯跡の全長や作業場の有無などを調査しました。今年度は主に窯の構造を調べるため、8月に調査を行いました。

弥七田古窯跡とは県史跡・大萱古窯跡群の1つです。17世紀前半に操業した連房式登窯で、弥七田織部という特有の織部を焼いた窯として知られています。

調査では、昨年度に引き続き愛知学院大学文学部の藤澤良祐教授と学生の協力を受けました。藤澤教授は瀬戸・美濃の窯や製品に詳しく、調査に必要な助言を受けることができました。

弥七田古窯跡位置図



部屋の間に隔壁がない

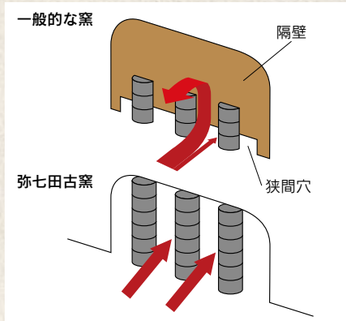
調査の結果、支柱の様子から、1号窯には熱を対流させるための壁（隔壁）が無いことが分かりました。この時期の窯は、隔壁と次の部屋に炎が抜けるための穴（狭間穴）があるのが一般的で、隔壁がない連房式登窯は全国でも見つかっていません。

また支柱の配置に規則性がなく、丸や四角の柱が混在しています。これも連房式登窯としては初めての事例です。

これらは元屋敷古窯（土岐市）から技術が広がっていく過程で起こった現象ではないかと考えています。連房式登窯を詳しく知らない陶工が、見聞きした情報を元に窯を造ったために、他に例のない形状の窯が生まれたのではないでしょうか。

隔壁も造る必要がなく、窯を支えて部屋を区切る柱を立てればよいというつもりで造りますから、そこらにあるものを適当に柱として利用したのでしょう。その結果、製品を入れる容器に粘土を詰めて柱を造るなど、さまざまな形状の柱が混在することになったのではないでしょうか。

隔壁模式図



炎が対流せず柱の間を抜けていくため燃焼効率が悪いと考えられますが、その窯で弥七田織部や鉄釉（てつゆう）製品、御深（おぶか）井釉製品が他の窯と同じように焼かれたようです。

容器に粘土を詰めた柱（左）と粘土を角型に成形した柱（右）

草や花の描かれた窯道具が出土

出土した陶片の多くは鉄釉の碗類でした。次に御深井釉製品が多く、わずかですが志野織部、皿、すり鉢も焼かれていたようです。弥七田織部の出土がごくわずかなことから、貴重なものであることが確認できました。

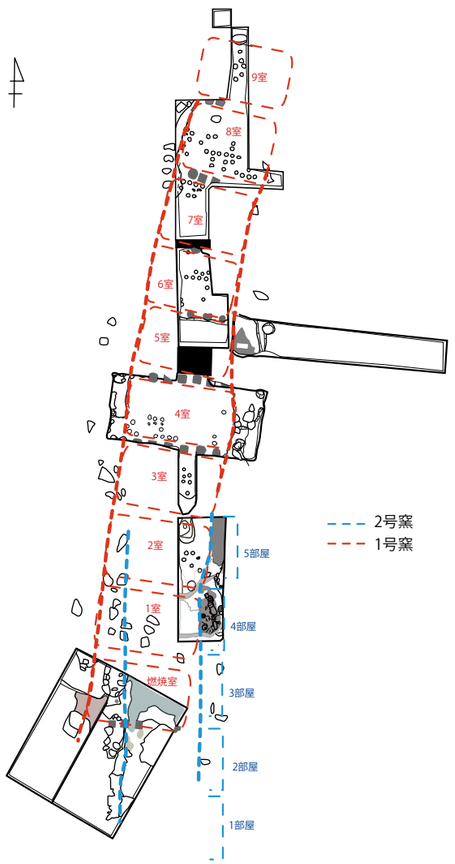
草や花の描かれたエブタ

また窯道具では、裏側に草や花の絵が描かれたエブタ（焼成する陶器を灰や破片から守るための容器のふた）が出土しました。記号が描かれることはよくありますが、上手な絵が描かれたものは全国的にも珍しい事例です。このような絵をヘラなどで描くには、絵筆の技術が必要だったと思います。身近な窯道具に、陶工の好きな絵を描き込んだのかもしれません。

今後の予定

今回の調査結果を報告書にまとめ、大萱古窯跡群として一体で国史跡の指定を受けるための手続きを進めます。国の歴史を語る上で欠かせない遺跡に指定されることは地域の誇りにつながります。こうした歴史資産を大切に伝えていきたいと思います。

弥七田古窯跡平面図（縮尺は 1/170）



1号窯の全長が 20 m以上、製品を焼く部屋（焼成室）が9室、2号窯は全長8．7m以上、焼成室は5室以上であることが分かりました。2号窯は1号窯の廃棄後に造られ、少なくとも1回は壁と床面の大改修が行われています。

弥七田で発掘された陶片

青織部菊皿

菊の花の形をした皿です。全体に長石釉をかけた後、緑釉をたらしかけ、鉄絵を描いています。

御深井釉蓋

茶入の蓋と考えられます。上面に御深井釉をかけています。

長石釉鉄絵丸皿

鉄絵を描いた後に、長石釉をかけています。

鼠志野向付

鉄化粧をした後に掻き落としで絵を描き、後から長石釉をかけています。

展示と報告会を開催します

今回の調査について、ミニ展示と報告会を開催します。窯跡の様子や出土品など、調査から分かった最新情報を紹介します。

ミニ展示

期間　11月30日（水）まで
時間　午前9時～午後4時
場所　可児郷土歴史館
入館料　200円（特別展「村絵図展」もご覧いただけます）

報告会

期日　11月26日（土）
時間　午前10時30分～11時30分
場所　久々利公民館
※参加費無料。申込不要。

問合先　文化財課